

大学生の自己教育力に関する研究（7）

出身高校差の検討

森 敏昭 石田 潤 清水益治 富永美穂子
 (広島大学) (神戸商科大学) (大阪樟蔭女子大学) (広島大学)

目的 本研究の目的は、大学生の自己教育力の出身高校による違いを検討することである。森ら(2001)は、受験競争が激化する中学時代に自己教育力を身につけた生徒の方が、偏差値のランクが上位の大学の入学試験に合格する可能性が高いことを示し、「自己教育力」と「基礎学力」の関係が相補的關係であることを示唆した。この示唆から、進学校と普通校を比較すると、進学校の方が自己教育力も高いことが予想される。

方法 調査対象 西日本にある7つの大学の学生計789名(男248名、女541名)を調査対象とした。

調査内容 ①自己教育力尺度 森ら(2001)による尺度。この尺度は自己教育力に関する7つの特性(課題意識、主体的思考、学習の仕方、自己評価、計画性、自主性、自己実現)を、それぞれ5項目ずつ、計35の質問項目について「はい、いいえ」の2件法で答える尺度である。各特性の質問項目の例は、以下のようなものである。課題意識：授業が始まった時、「よし、勉強しよう」という気持ちになりますか。主体的思考：人のまねをするよりも、自分で工夫するほうが得意ですか。学習の仕方：本を読む時、大切なところは線を引いたり書き出したりしていますか。自己評価：試験で問題を解いた後で、間違いがないかどうかを点検していますか。計画性：休みの日には一日の予定を立てて行動しますか。自主性：授業中に、自分からすすんで意見を発表するほうですか。自己実現：人々の役に立つ人間になりたいと思いませんか。

②出身高校 公立進学校、私立進学校、公立普通校、私立普通校、その他のうち、いずれかに○

をつけてもらった。

手続き 自己教育力の尺度と他の尺度を組み合わせた冊子を作成し、平成12年12月から13年1月にかけて、各大学の教室で実施した。

結果と考察 公立進学校(351名)、私立進学校(91名)、公立普通校(241名)、私立普通校(85名)を選んだ者を分析対象とした。各群の領域ごとの得点および合計点の平均は、表1の通りであった。学校差を調べるために、それぞれについて1要因の分散分析を行った。その結果、合計では、公立進学校が公立普通校と私立普通校よりも、私立進学校が公立普通校よりも得点が高かった(テューキー法。p<.05。以下、自己評価を除き、同じ)。課題意識と主体的思考では公立進学校と私立進学校が公立普通校よりも得点が高かった。学習の仕方では2つの進学校が2つの普通校よりも得点が高かった。自己評価では公立進学校が私立普通校よりも、私立進学校が公立普通校と私立普通校よりも得点が高かった(LSD)。計画性と自主性では公立進学校が公立普通校よりも得点が高かった。自己実現については有意差はなかった。

公立進学校と公立普通校の差はほとんどの領域で有意であったことから、公立進学校の方が公立普通校よりも自己教育力を伸ばす指導が行われていると考えられる。

自己実現では高校差がなかったことについて、大学生になったことで1つの自己実現になっているのかもしれない。

次報では、自己教育力に影響する指導方法の要因さぐるため、公立の進学校と普通校の間で、指導方法による違いを調べる。

表1. 領域ごとの平均得点(標準偏差)

	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現	合計
公立進学	2.6(1.3)	2.9(1.3)	3.3(1.1)	3.2(1.2)	2.7(1.5)	2.4(1.3)	3.9(1.2)	20.1(5.2)
私立進学	2.5(1.4)	3.0(1.6)	3.4(1.1)	3.3(1.2)	2.5(1.5)	2.5(1.5)	3.8(1.3)	21.1(6.5)
公立普通	1.9(1.3)	2.5(1.4)	2.9(1.1)	3.0(1.1)	2.3(1.5)	2.1(1.3)	3.6(1.3)	18.4(5.4)
私立普通	2.2(1.4)	2.7(1.5)	2.8(1.1)	2.9(1.2)	2.5(1.7)	2.3(1.2)	3.8(1.3)	19.1(5.8)

一連の研究は文部省科学研究費(基盤研究(B)-(1), 課題番号:11410032)の補助を受けた。